

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：ひゃくえむ

あらすじ

小学生のトガシは生まれながらにして足が速く、周囲から一目置かれる存在であったが、走ることに楽しさや意味も見出せずにいた。ある日、何の取り柄もなく内向的な少年・小宮と出会う。小宮は「現実より辛いことをすれば現実がぼやけるから」と、遅いながらも死に物狂いで走る少年であった。トガシは小宮に「100mを誰よりも速く走れば全部解決する」と語り、二人は互いの存在を通じて走ることを意味を見出し始める。しかし二人の関係は、小宮の突然の転校によって断ち切られてしまう。

高校に入り走ることをやめていたトガシと、記録だけを追い求め自らを研ぎ澄ませていった小宮。それぞれ異なる道を歩んだ二人は、インターハイの決勝で再会する。しかしその再会は、二人にとって思いがけないものとなった。

さらに10年の歳月が流れる。走る意味を見失ったトガシと、記録の世界に閉じこもる小宮。二人はそれぞれの苦悩を抱えながら、日本選手権の舞台で三たび巡り合う。100メートル。横一線に並び、一斉にスタートする。そのわずか10秒余りの中で、二人は走ることに、そして生きることに意味と向き合うことになる。

本作は、100メートルを走るという行為を通じて「なぜ走るのか」という問いが繰り返し投げかけられている。そしてその問いは、やがて「なぜ生きるのか」という実存的な問いへと深まっていく。勝敗や記録の向こう側にあるもの——生きることに意味を、走ることの中に見出そうとする人々の姿を描いた作品である。

今回のテーマ

I. スポーツアニメの変遷とひゃくむ

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

III. 高校時代のトガシと小宮について考える

IV. 現実逃避と潜在空間——あれから 10 年

V. ガチになること——極上の 10 秒

VI. まとめ

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

スポーツアニメは時代とともにその構造を変えてきた。1960～70年代の高度経済成長期に生まれた「スポ根」作品では、鬼コーチによる過酷なトレーニングに耐え抜き成長する主人公が描かれた。「エースをねらえ！」に代表されるように、宗方コーチという明確な父性的存在のもとで、岡ひろみは反発し、ぶつかりながらも導かれ、孤独の中で一人の個として成熟していく。強い父性のもとで方向を示され、歯を食いしばって努力することが美德とされた時代の空気が、そのまま作品に反映されている。父性の導きのもとで「い

かにして強くなるか」が問われた物語であった。

一方、2010年代に登場した「ハイキュー!!」では、明確な父性の存在は薄れ、チームという共同体の中で一人ひとりが生き生きと躍動する姿が描かれる。選手たちはチームに抱えられる中で安心感を得ながら主体的にプレーし、自分の役割を見出していく。2010年代は、終身雇用や年功序列といったこれまでの社会構造が揺らぎ、個人が多様なつながりの中で自分らしさを模索する時代であった。上から導かれる父性よりも、横にいて支え合う関係性の中でこそ人は主体的になれるという感覚が自然なものとなり、「いかに生き生きとプレーするか」が問われた物語が若者の心を掴んだのである。

では「ひゃくえむ」はどうか。100m走は横一線に並び一斉にスタートする。全員が対等な地点から走り出す。走っている間、走者は完全に一人である。コーチが導くわけでもチームメイトが支えるわけでもない。そしてこの作品が問うのは「いかに強くなるか」でも「いかに生き生きとプレーするか」でもなく、走ることを通じて「生きるとは何か」という実存的な問いである。人はどのようにして生きることを意味を掴み取るのか。それが本作の核心であり、スポーツアニメの新たな地平を切り開く特異性なのである。

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

1) 登場人物紹介

トガシ：足がとてつもなく速く、周囲から一目置かれる存在であった。しかし本人は走ることに楽しさや意味を見出しておらず、速さが周囲からの評価に関してトガシ自身にとって何を意味するのかは、まだ問いにすらなっていない。

小宮：内向的で対人緊張が強く、自分に自信を持てずにいる少年である。現実の辛さから逃れるために、「現実より辛いことをすれば現実がぼやけるから」と、より辛い走るといふ行為を自ら選び取った。遅いながらも常に死に物狂いで走り続けるその姿には、トガシの空虚とは対照的に、強い情念が宿っている。

2) ジュリエット・ミッチェルのきょうだい葛藤と同胞殺害幻想

精神分析において心の葛藤は主に親子関係、とりわけラカンの「父の法」に代表される

垂直的な関係の中で論じられてきた。これに対しジュリエット・ミッチェルは、きょうだい関係という水平的な次元に着目し、「母の法」を提唱した。

幼い子どもにとって母との関係は世界のすべてであるが、新しい赤ちゃんの誕生によりその独占的な関係は永遠に失われる。この時、子どもの心には赤ちゃんを排除したいという激しい衝動が生まれる。母の法とはこの衝動に対する禁止であるが、それにより子どもは以前の母子関係には戻れないという喪失を自ら受け入れ、きょうだいと対等な存在として共に生きることを引き受けていく。母の法とは「排除したい相手と共に生きる」ことを求めるものであり、その根底には喪失の受け入れという痛みが伴っている。

3) 母の法のフィールドで出会った二人

100m 走は横一線に並び一斉にスタートする。誰も特権的な位置にはおらず、全員が対等な地点から走り出す。この構造はまさに母の法に基づくものである。トガシによって小宮は 100m 走の世界に誘われたが、二人は兄弟の関係になり、結果としてこの母の法のフィールドに入ることとなる。

子ども時代の二人は、それぞれ異なる形で閉じた走りの中にいた。トガシは生まれながらに速いが、そこに主体的な選択はなく、走ることに何も見出していない。本当の自分はまだ、そこにいないようにも感じられる。一方の小宮は、周囲から否定的な言葉ばかりを投げかけられ、誰にも認めてもらえない孤独の中で、「現実より辛いことをすれば現実がぼやける」と、身体的な苦痛で心理的な痛みを覆い隠すためにただ走っていた。それは競争でもなく目標でもなく、痛みで痛みを打ち消すという、自傷行為に近いものであった。

トガシの空虚と小宮の孤独な痛み。形は異なるが、どちらも他者に対して開かれてはいないという点で共通している。そこに互いが現れたことで、走るものの質が変わり始める。小宮はトガシとの交流を通じて走りに磨きをかけ、次第にトガシに肉薄していく。トガシにとって、意味なく速いだけだった走りに、初めて他者が介在する体験が生まれる。小宮にとっても、孤独な自己処方ではなかった走りが、初めて「誰かと共にある」営みへと変わり始める。

ここにきょうだいトラウマの構造が立ち現れる。小宮の台頭はトガシの唯一の存在証明である「速さ」を脅かし、排除したいという fratricidal fantasy (同胞殺害幻想) が生じうる。しかし同時に、小宮がいるからこそ走ることに意味の萌芽が生じている。きょうだいは自分の居場所を脅かす存在であると同時に、その存在がいるからこそ自分の中に新しい生が芽吹く。この両価性こそが母の法のもとのきょうだい関係の核心である。

しかし土手下での競走で勝敗の行方がわからないところまで来た矢先、小宮は親の都合

で突然翌日に転校していく。閉じた走りから開かれた走りへと変わりかけていた二人の関係が、きょうだい葛藤に向き合う機会すら与えられないまま、親という外部の力によって一方的に断ち切られたのである。

トガシにとって、fratricidal fantasy（同胞殺害幻想）を抱えていた中での突然の喪失は、まるで自分の無意識的な願望が実現してしまったかのように体験されたかもしれない。思考の万能感（omnipotence of thought）による罪悪感である。しかも前日まで一緒に走っていた相手が翌日にはいなくなるという突然さは、悲哀の作業（mourning）を行う余地を与えない。この処理されなかった喪失と罪悪感が、高校に入ったトガシが走る意味を見出せなくなっていく空虚さの根底にあると考えられる。そして小宮の側にもまた、独自の fratricidal fantasy があつたと考えられる。トガシに肉薄し、もしかしたら追い越すかもしれないという状況は、小宮にとっては自分が憧れ、目標としてきた存在（父親的存在）を「殺す」ことになりかねない。小宮は中学生のときに足を怪我するが、怪我が癒えた後も怪我を恐れ、全力で走れなくなる。そこにはトガシを超えてしまうことへの無意識的な恐れ、父親殺しであり、同胞殺害幻想が身体の次元に現れていたように感じられる。

その二人が、高校生になり、お互いに別々に新たな出会いを通じて、再び走る意味を見出し、同じ舞台に立つのである。

そしてここで振り返りたいのは、前対話のシーンで扱ったときに出てきたトガシが小宮に語った言葉である。トガシは「100m を誰よりも速く走れば全部解決する」というテーマを示し、小宮が自分にもそれができるかと問うたとき、「それを決めるのは君だよ」と答えた。これは成長への選択を迫る父性の導きであり、小宮はこの言葉を理想化した存在からの導きとして受け取ったであろう。以後、小宮はトガシという父性的対象に追いつけ追い越せという目標の中で自らを鍛えていくことになる。

しかしトガシ自身もまた、走ることに意味を見出せずにいる子どもであった。あの言葉は小宮に向けられると同時に、トガシが自分自身に言い聞かせていた面がある。「自分で決めるしかないんだ」と。つまりあの瞬間、小宮はトガシを見上げていたが、トガシもまた答えを持たない一人の子どもであり、二人は共に大人の入口に立っていたのである。大人の入口に立つとは、主体性の確立の形成期にあるということであり、走ることを通じて自分はどう生きるのかを考え始めるきっかけがここに生まれたと言える。

その二人が、高校生になり、新たな出会いを通じて、再び走る意味を見出し、同じ舞台に立つ。道筋は異なっても、走ることを通じて「生きるとは何か」という問いを抱えて。

Ⅲ. 高校時代のトガシと小宮について考える

1) 登場人物紹介

浅草 葵 (あさくさ あおい)：トガシが通う鰯第二高校陸上部の先輩部員。競技の才能には恵まれていないが、陸上に対して人一倍の熱い想いを持っている。廃部寸前の弱小陸上部にあっても、その情熱は失われることがない。トガシの中に眠る可能性を感じ取り、陸上部へと勧誘する。葵にとってトガシの速さや実績は関係なく、ただ走る存在としてのトガシを受け入れ、求めた。その姿勢が、走ることに意味を見出せなくなっていたトガシに再び走り始めるきっかけを与えることになる。

仁神 タケル (にがみ たける)：100m 元日本代表の親を持ち、中学時代には陸上界のスター選手として名を馳せていた。トガシが小学6年の頃、その活躍は広く知られていた。しかし常に勝つことを求められる重圧に押し潰され、走ることをやめてしまう。数年後、トガシが進学した鰯第二高校で陸上部の幽霊部員となっていた。偉大な父の影のもとで、走ることが父の期待に応える行為でしかなくなり、走る喜びを失ってしまった青年である。

経田 (つねだ)：小宮が所属する九州の名門、西沢高校陸上部の部長。九州ナンバーワンの実力を誇る。部の頂点に立つ実力者であるが、それゆえに小宮の台頭を脅威に感じ、小宮の走り方そのものを否定する。その姿には、自分の地位を脅かすものへの嫉妬と恐れが見て取れる。

財津 (ざいつ)：長年にわたり日本陸上界を牽引する絶対王者であり日本記録保持者。小宮の所属する西沢高校陸上部のOBでもある。高校を訪れた際の講演で、小宮から質問を受け、「不安とは君自身が君を試す時の感情だ」という言葉を贈る。小宮の才能をいち早く見抜いた人物である。

2) ウィニコットの潜在空間 (potential space)

イギリスの精神分析家 D.W.ウィニコットは、人が創造的に生きるために不可欠な心の領域として「潜在空間 (potential space)」という概念を提唱した。

潜在空間とは、内的な空想の世界と外的な現実の世界の間にある「第三の領域」のことである。子どもの遊びを思い浮かべるとわかりやすい。たとえば子どもが棒切れを剣に見立てて遊んでいるとき、子どもはそれが「本当の剣ではない」ことを知っている。しかし

同時に、遊んでいる間はそれが「剣である」という体験に没頭している。これは空想でもなく現実でもない、その間にある独特の体験の領域である。

大人にとっても、この潜在空間は生きる上で欠かすことができない。たとえば音楽に没頭しているとき、スポーツに夢中になっているとき、人は現実を忘れていたわけではないが、現実の重さから一時的に解放され、生き生きとした感覚の中にいる。ウィニコットはこの体験を「遊ぶこと (playing)」と呼び、人が本当の意味で自分自身でいられるのは、この潜在空間の中においてであると考えた。

ただし、潜在空間は一人で作り出せるものではない。ウィニコットが強調したのは、この空間が生まれるためには、安心して遊べる「抱える環境 (holding environment)」が必要だということである。赤ちゃんが母親に抱えられることで安心して遊び始めるように、人は誰かに受け入れられ、支えられているという感覚があって初めて、潜在空間の中で創造的に生きることができるのである。

3) 潜在空間の萌芽と父性的対象の世界

①トガシのケース

高校に入り、走ることをやめていたトガシを変えたのは、浅草葵の存在であった。廃部寸前の弱小陸上部でただ一人、陸上への情熱を燃やし続ける葵は、トガシに走ることを求めた。しかしそれは、速さや結果を求めるものではなかった。葵はただ「100m を走るトガシ」という存在を受け入れたのである。

この受け入れが、トガシにとっての抱える環境 (holding environment) となった。子ども時代、トガシは「速い子」として周囲から一目置かれていたが、それは能力に対する評価であり、トガシという存在そのものの受容ではなかった。しかし葵に抱えられることで、トガシの中に潜在空間が芽生え始める。走ることが、誰かの期待に応えるための行為でも、意味を問われる行為でもなく、ただ無心に没頭できる「遊び」になったのである。後に海堂が「現実逃避」という言葉で語ることになるものの原型が、ここにあったと考えられる。ただしこの時点ではまだ言語化には至らず、トガシはそれを一つの感覚として掴んだにすぎない。

そしてこの潜在空間の体験は、言葉を介さず、一緒に走るという行為を通じて仁神タケルにも伝わっていく。仁神は 100m 元日本代表の親を持ち、常に勝つことを求められる重圧の中で走ることをやめていた。偉大な父の影のもとで、走ることが父の期待に応える行為でしかなくなり、そこに潜在空間の入り込む余地はなかった。まさにエディプスコンプレックスに押し潰された状態である。しかしトガシと走ることで、仁神はトガシに敗れた

にもかかわらず、走る喜びを感じた。勝敗が絶対的な意味を持つ父の法の世界では、負けることは挫折でしかない。しかし潜在空間の中では、勝ち負けの向こう側にある走ること自体の喜びに触れることができる。仁神が再び走ることを決めたのは、トガシとの間に生まれた潜在空間の中で、父の法に支配されていない走りを初めて体験したからではないだろうか。

②小宮のケース

一方、小宮の歩みはトガシとは対照的である。小宮の世界は、トガシとの出会い以来、一貫して父性的対象によって構成されてきた。

子ども時代、小宮にとってトガシは理想化された対象であった。速く、自分にはないものを持つ存在。しかもトガシは「100mを誰よりも速く走れば全部解決する」というテーマを示し、小宮が自分にもそれができるかと問うたとき、「それを決めるのは君だよ」と選択を迫った。これはまさに父性の機能である。支持しながらある方向へと導く。「こうしろ」と命じるのではなく、成長への選択の主体を小宮自身に委ねつつも、方向を指し示す。小宮はこの導きのもとに走り始め、トガシに追いつき追い越すという目標の中で自らを鍛えていった。

高校に入ってから、小宮を取り巻くのは父性的な対象である。日本陸上界の絶対王者である財津は、小宮の才能をいち早く見抜き、「不安とは君自身が君を試す時の感情だ」という言葉を贈った。理想化された父性であり、その言葉は小宮を鼓舞し、古傷のトラウマを克服する契機を与えた。一方、部長の経田は九州ナンバーワンの実力者でありながら、小宮の才能を恐れ、走り方そのものを否定した。同じ父性的な存在でありながら、こちらは抑圧的で迫害的な父性である。子ども時代に周囲から否定的な言葉を投げかけられ続けた体験が、ここで反復されている。

こうして見ると、小宮は常に誰かを見上げるか、誰かに否定されるかという垂直的な関係の中で生きてきたことがわかる。理想化されたトガシ、理想化された財津、迫害的な経田。追いつけ追い越せという目標の中で自らを研ぎ澄ませてきた小宮の歩みは、父性的対象との関係によって駆動されてきたのである。

しかしそこに決定的に欠けていたのは、水平的に抱えてくれる存在、すなわち母性的な抱えであった。トガシには葵がいた。葵はトガシを評価するのではなく受け入れ、それが抱える環境となり、潜在空間が生まれた。しかし小宮にはそのような存在が現れない。財津の言葉はあくまで父性的な導きであり、抱えの中で安心して遊ぶという体験ではない。だから小宮の走りには潜在空間が生まれず、無心に没頭するという「遊び」の質が宿らな

い。小宮の走りは常に「目標に向かって努力する」という父性的な構造の中にあった。

抱えのないまま、小宮は自己愛的な殻の中へと閉じこもっていく。確率と計算、傾向と対策、そしてその先にある偉大な記録。それらに固執することで、小宮は走り続ける理由を自ら作り出していった。しかしそこには他者がいない。記録という数字は他者を必要としない。子ども時代に身体の痛みで心理的な痛みを覆い隠していた自己処方は、より知的に精緻化された形で続いていたと言える。防衛の形は変わっても、根底にある孤独と、他者に対して開かれていないという構造は変わっていないのである。

潜在空間の萌芽を得たトガシと、父性的対象の世界の中で潜在空間に触れることのできないまま研ぎ澄まされていった小宮。この二人が、インターハイの決勝で再び同じスタートラインに立つ。それは子ども時代に突然断ち切られたきょうだい関係の、長い時を経ての再会である。

4) トガシと小宮の再会 処理されなかった喪失の重さ

インターハイの決勝、雨の中で二人は再会する。子ども時代に突然断ち切られた関係が、晴れやかな舞台ではなく雨の中で再び結ばれるということが、処理されなかった喪失の重さを暗示している。

決勝でトガシは小宮に敗れる。しかし走り終えた後、小宮がトガシに告げたのは「トガシくん、走り方、変わったね」という失望の言葉であった。小宮はずっとトガシを父性的な理想化された対象として追いかけてきた。「あのトガシに追いつき、追い越す」ことが小宮の走る意味であった。しかし目の前のトガシは、かつての走り方をしていない。葵に抱えられ、潜在空間の中で走ることを覚えたトガシは、小宮が追い求めていた「あのトガシ」とは別の存在になっている。

小宮はトガシに勝った。しかし勝利は空虚であるように感じられる。追い越すべき理想化された対象がもうそこにはいないのだから。「100mを誰よりも速く走れば全部解決する」というテーゼそのものが、この瞬間揺らぎ始めるのである。